

# 八朔祭の変遷

祭りのうつり変わりをまとめました



(ゴジラとマグマ大使)昭和42年の大造り物



七畝稲荷御神幸

八朔祭は、浜町の町場の人々によって行われる「都市のお祭り」です。この祭りの最大の特徴は、周辺農村の豊作を祈願して制作される「大造り物」です。「豊作祈願」と「造り物」の2つの結びつきは江戸時代以降に遡るものと考えられ、この祭りの最も重要な要素となっています。浜町に残る歴史資料では、江戸時代中後期には小一領社の祭礼にて氏子によって農耕祭事的要素を含んだ「地踊り」という芸能が行われていました。また、天明5年(1785年)の雨乞い祈禱に際して、浜町の町家を中心に「作物(つくりもの)」を制作していたとの記録が残ります。

現在の八朔祭は、こうした伝統を中心として、近代以降、時代が変遷していくなかで、商売繁盛の神を祭る七畝稲荷などの信仰のほか様々な要素を加えながら、多くの人々が関わる祭りとして、賑やかに発展を遂げつつ継承されてきたものです。

昭和時代の恐慌や第二次世界大戦などの影響で、八朔祭は数度中止されましたが、昭和22年(1947年)に再開されると、祭りはより盛大に実施されるようになっていきます。昭和24年(1949年)頃から、祭りの日数はほぼ2日とされ、昭和30年代後半から9月1日・2日に固定されました。祭りでは商家の人が農家の人をねぎらい、厚くもてなしました。造り物制作にもより一層力が入り、世界平和を願うものや、社会の混乱を表したものなど世相風刺的要素が色濃く見られるようになりました。

現在の八朔祭は豊作を祈願して9月の第一土曜日・日曜日に行われ、「大造り物の引き廻し」で祭りは最高潮に達します。  
※八朔祭の変遷には諸説あることをお断りします。

## 現在の八朔祭スケジュール

前夜祭	午後7時30分 朝起こし
1日目	午前10時 七畝稲荷御神幸、豊作祈願祭(小一領神社)
	午後3時 各小中学校鼓笛隊・吹奏楽部、各種団体・連合組のおどり・みこし・太鼓
2日目	午前10時 陸上自衛隊音楽隊、各種団体おどり・みこし・太鼓
	午後1時 大造り物引き廻し出発
	午後1時30分 大造り物審査(祭り本部)
	午後7時30分 花火大会(通潤橋前)

※会場は熊本県上益城郡山都町の浜町商店街一帯  
※開催日は例年9月の第一土曜日(1日目)・日曜日(2日目)の予定

# 祭りの主役 大造り物

近年の大造り物の特徴をまとめました



## ■住民の共同作業が命

八朔祭の大造り物は、昔から連合組ごとに、住民の共同作業により制作されます。制作期間は数か月にも及びます。しかも毎年、題材は異なります。制作技術の継承・向上もさることながら、住民の協力、連携が不可欠です。一方、近年は作り手のみんさんの高齢化、人手不足などにどう対処するかが課題となっています。



## ■出来栄は日本一

全国に「つくりもの」を主役とする祭りはたくさんあります。その中でも、八朔祭の大造り物は精緻さ、大きさ、迫力ともに優れており、「出来栄は日本一」という声もあります。大造り物を作り上げる原動力は、何か？八朔祭では、大造り物の審査が開かれグランプリの金賞が決まるため、競争により大造り物が進化してきたという一面があります。しかし、最大の要因は「たくさんのお客のみんさんに喜んでほしい」という、作り手のみんさんの心意気(もてなしの心)にあるようです。



## ■風刺とユーモアあふれるタイトル

大造り物に込められた「タイトル(表題)」も見所の一つです。例年、世相を風刺したり、庶民の願望をユーモアを交えて表現したタイトルが大造り物ごとにつけられ、祭り当日に仮装やお囃子とともに披露されます。一例をあげると、ガマの大造り物にかけて「自分で守ろう自分の身体、健康管理でガマだすばい」など。タイトルを楽しみにしている見物客の方も多いということです。



## ■材料は自然の素材

大造り物の素材は、山野に自生する杉、ススキ、竹、シュロの皮、どんぐり、かずら、松笠などです。これらの素材を加工して部材を作り、本体に肉付けしていきます。引き廻される大造り物の躍動感、自然の素材のエネルギーとそれを最大限に引き出す匠の技によるものなのかもしれません。近年の作り手のみんさんの悩みは、自然環境の変化により、必要な材料が入手できないことが増えていることだとか。

